

たたかう労働組合・回転寿司ユニオンに総結集して、労使関係正常化闘争を完遂しよう！

労使関係の正常化をめざして

9

2026/1/25

編集・発行：回転寿司ユニオン

はま寿司でまたも企業内組合を利用した不当労働行為！ 会社窓口は「第一組合(?)の組合活動には介入できない」と開き直り

はま寿司でまたも不当労働行為が発生した。まったく、この会社の辞書には「法令遵守」の4文字はないのかと呆れるばかりだ。

今回の不当労働行為は、暮迫る昨年末に発生したもので、埼玉県内の店舗ではたらく回転寿司ユニオン組合員が、所用により同店の店長（企業内組合員）に架電した際になされた。その内容はおおむね、店長が組合員に①なぜ回転寿司ユニオンに加入したのか、②はま寿司従業員組合会に復帰する考えはないのか、③回転寿司ユニオンはスシロー主体の労働組合だから、他社にいく考えはないのか、等と問うたものである。

本件については年明けすぐに抗議を申し入れたが、会社側窓口は「第一組合の組合活動には会社では介入できない」としている。しかし、当然このような言い分が通るはずもない。すなわち、たしかに企業内組合の組合員が組合活動することは当然自由だし、回転寿司ユニオンに対する道理ある批判をすることもまったく自由である。ところが、今回の事案は①店長という職位にあるものが、その地位を利用して、②その就業時間中に、行なったという点で、通常の組合活動とはまったく異なるものである。

会社側は「店長という地位と個人は切り離せない」というが、本件は店長という職制ないし機関として就業時間中に受けた電話でのことであり、たとえば店長が休日に組合員個人との食事の場でオルグをするのとは事情が異なる。

さらに、そもそも企業内組合を「第一組合」と呼ぶこと自体も意味不明だ。さすがにこれは会社側窓口もすぐに「はま寿司ユニオン」と言い直したようだが、内部では企業内組合を「第一組合」、回転寿司ユニオンを「第二組合」と呼び分けている疑念が生ずる。しかし実際には、はま寿司の企業内組合をはじめとして、「ゼンショー労連」各単組（ゼンセン加盟はのぞく、以下同じ）は、「ゼンショー・すき家不当労働行為事件」以降、既存のたたかう労働組合対策として結成された（させた）組合であり、通常の語の用法では、はま寿司の企業内組合や「ゼンショー労連」各単組こそが「第二組合」なのである。

この会社に遵法精神はないのか？ 小川賢太郎会長の常軌を逸するインタビュー記事

1960年代～1990年代ならともかく、2026年にもなったいま、ここまで平然と不当労働行為を繰返す企業も珍しいだろう。しかし、ゼンショーの創業者で現会長の小川賢太郎氏が2010年に応じた、東洋経済のインタビュー記事を見れば、不当労働行為に及んでもたたかう労働組合をつぶそうとする姿勢がよくうかがえる。

「ゼンショー・小川社長が語る経営哲学」と題されたこの記事（<https://toyokeizai.net/articles/-/38199>、<https://toyokeizai.net/articles/-/38209>）では、途中からひたすら、すき家で未払い賃金問題などを暴き、ゼンショーから違法な団交拒否を受けていた首都圏青年ユニオンすき家グループ（すき家ユニオン）への批判をこえた中傷が展開される。

内容が労務問題に話が及ぶと、小川氏は突如「4万人働いている中でもものすごい少数で、首都圏青年ユニオンなんですけど、これはすき家だけで言えば、2万人ぐらいの就業者のうち数名なんですよ。全部で3名。量は質に転化するじゃないですけど、今回訴訟を起こした人は、店のおカネに手をつけたんです」と言い出し、「首都圏青年ユニオンって、共産党の別部隊なわけですよ、要するに」とか「首都圏青年ユニオンが党派拡大したいからということで、そういうふうになってきた。大きくしたんでしょうね。共産党も墮落していると思いませんか。僕らも労働運動をやってきたけど、労働運動というのは、まじめに働く労働者の権利を擁護するためのものですよ」などと、ひたすら「首都圏青年ユニオン＝共産党」というレッテル貼りをし、「われわれとしては、団交を言うのであれば、経営が対処するわけですから、やはり従業員の多数を代表したものと団交すべきであって、幾ら何でも2万人で3人なんて言って組合だと名乗って、首都圏青年ユニオンというのは外部勢力が牛耳っているわけですからね。だから、そこ団交するということは不適切ではないかと」などと、団交拒否を正当化する。

申し訳ないが、とてもまともな上場企業のトップへのインタビューとは思えない。平気でこのような中傷やレッテル張り、果ては違法行為の正当化を行なう人間が親会社のトップでは、はま寿司で不当労働行為が頻発しているのも、ある種当然というべきか。